

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 31日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520230

研究課題名（和文）近代英国演劇における挿入歌の劇的機能についての研究

研究課題名（英文）A Study of Songs in Early English Drama

研究代表者 境野 直樹（SAKAINO NAOKI）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：90187005

研究成果の概要（和文）：近世英国演劇における挿入歌は、当時の「流行歌」の援用・改作であったり、逆に劇から社会に流出して援用される際に、文脈的にみて興味深い双方向性を持っている。また音楽史の研究成果から、演奏形態を手がかりに上演された劇場の構造や規模などについて推測することで、たとえばシェイクスピアの『お気に召すまま』が大衆劇場ではなく、エリザベス女王の御前上演された可能性を検証し、新歴史主義的読解を修正することを試みた。

研究成果の概要（英文）：Songs in early modern plays sometimes can be regarded as a “fingerprint” of the theatrical conditions; music connects the fictive and real world as commodity. History of music, especially that of variety of consort, suggests that the songs in Shakespeare’s *As You Like It* shows the changing role and function of the Fool, and that the play was held in presence of the Queen. If such is the case, the famous cliché by New Historicism arguing this play with “subversion-containment” model should strongly be challenged.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：バラッド、英国演劇

1. 研究開始当初の背景

シェイクスピア劇をはじめとする近世初

期の演劇には、随所に挿入歌が存在するものが少なくない。たとえば『オセロー』におけ

るデズデモーナの「柳の歌」、『十二夜』末尾のフェステの一見プロットとは無関係な歌などは、いずれも状況の抽象化、相対化に寄与しつつもドラマの流れにひとつの区切りをもたらす効果を与えられている。前者は、劇のプロットから、ともあれ観客に一度距離を置かせることで、逆説的に劇への再度のコミットメントを強調する方向に機能しうるし、後者は「十二夜」という劇の occasion に相応しいパリノードたりえている。だがはたして挿入歌の機能はそれにとどまるのであろうか。これが本研究の着想となった。

挿入歌は演劇テキストの字面の意味作用の限界を超える可能性を秘めているのである。たとえば Eliza Haywood, *The Opera of Operas*(1733)終幕の、主役のカップルによるデュエットは、その歌詞を字面で追う限り、英国国教会の清純な結婚観を全面的に主張したプロパガンダのようにみえる。しかしながら、“Who shares a lover, does not love”というラインが歌われることによってくどいほどに反復される時、そこには一種独特な哄笑が誘発される可能性がある。そのときこの劇は、結婚を言祝ぐ芝居でありながら、同時にそうしたモラルの欺瞞を暴露している点で、パロディ、アイロニーの効果も提示することになる。そして挿入歌におけるこのリフレインなしに、この高度に重層化された劇のモラルを観客に呈示することは簡単ではない。

平成13～16年度科学研究費補助金による基盤研究「罪の意識のレトリックをめぐる近世英国演劇・バラッド・パンフレットに関する研究」(単独研究)において申請者は、16世紀の世俗文芸の中ですでに聖書に依拠する同一の章句が、ジャンルを横断することでパロディとしての機能を発揮する例を多く指摘した。この成果も本研究の着想をも

たらした経緯の一端となっている。

2. 研究の目的

近代演劇における挿入歌のもつ演劇的效果を、バラッドの系譜という文学史的・音楽史的コンテクストの双方に配慮しつつ出典、(劇中で改変されたものであれば)原曲などについての基本情報をまず精査し、楽曲がドラマの中に置かれることで発揮する異化、パロディ、世俗化(一般化)など固有の意味作用について可能な限り、個々のケースに即して分析することで、演劇というジャンルのダイナミックな再評価に貢献することが、本研究の目的である。

演劇作品において挿入歌がもつ娯楽性は、商業演劇黎明期のごく早い段階ですでに注目されていた。英国演劇データベースや *Early English Books Online* などのデータベースを駆使して、その始原を確認することを試みた。劇中の楽曲としての演劇的效果については、おおよそ以下(1)～(5)の分類を、研究開始時点では考えた。それぞれのケースについて、楽曲の使用が歌詞/台詞をストレートに伝える機能とパロディ・アイロニーとして伝達する可能性について、考察した。

(1)演劇作品において挿入歌がそれじたい作品のオリジナルな一部となる場合

(2)当初はバラッドとして独立した出自を持ちながら、その歌詞を保持したままで挿入歌として用いられるケース

(3)芝居の内容に即して歌詞の改変を受けることで完全に劇の一部として機能するケース

(4)芝居の内容に即して歌詞の改変を受けながらも、当初のバラッドとしての意味作用の痕跡を保持することで、複雑な観客反

応を誘発するケース

(5)複数の異なる劇作品に異なる（あるいは同一の）歌詞で挿入されることで、バラッドじたいの出自との関係性に加えて、それら複数の演劇作品相互の参照性までも受容の力学に考慮しなければならないケース

挿入歌の意味作用についての考察は、複雑な観客反応についてのモデル理論を必要とするであろうし、ある程度は音楽史的知識、音楽美学の成果の援用なども考慮する必要があるだろう。しかしながら、初期オペラに至る演劇史の展開については、文学研究の場からの発信もまた待望されているはずである。本研究は王政復古期のオペラまでも射程に据えることで、マルチメディア舞台芸術としての演劇研究のフィールドを、紙上から空間・時間の広がりへと解放することをめざす。それじたいの歴史性をもつ音楽は演劇の伝統と接したときどのような意味作用をもたらすのか。本研究は演劇挿入歌に纏わる文学性の評価という難問に取り組むものである。

3. 研究の方法

演劇作品中の挿入歌の効果を、(1)その楽曲のオリジナルなコンテキスト、(2)戯曲内での位置づけ、(3)台詞が歌詞に変容することで戯曲にたちおこる意味作用の諸観点から考察する。

1650年頃まで（劇場閉鎖以前をひとつの区切りとする）の演劇作品における挿入歌について調査・研究する。具体的には英国韻文劇・散文劇データベースをてがかりに、挿入歌をもつ演劇作品の基礎データを作成。それを楽譜のライブラリ・データベースとつきあわせる作業を行った。この段階までで特定できた作品について、「研究目的」で

述べた(1)～(5)までの各カテゴリーへの妥当性を検討した。文学史的評価である以上、解釈による恣意性の介在は防ぎようがないが、あらゆる意味作用の可能性について、これを排除しないというポリシーにより、挿入歌曲の劇的効果の多様性を積極的に発掘することを心がけた。（網羅的であることはもちろん望ましいが、対象作品との時代的な遠さによる情報不足ゆえ、方法論的境界もあり、ここではむしろ、多様性が重要であるという認識にたつこととした。）

4. 研究成果

上記計画に基づいて、17世紀後半までの演劇作品の挿入歌について、それぞれの「同工異曲」を遡上可能なところまで、楽譜を手がかりとしつつ調査することで、(1)いわゆる古謡（バラッド）が改作されて挿入されるケース、(2)当該演劇作品上演時点での「流行歌」がほぼそのまま挿入されるケース、(3)それら流行歌が旋律はそのままで歌詞を変更されて挿入されるケースなどの分類で、データベース化することができた。特に(3)については、たとえばシェイクスピアの『十二夜』幕切れの道化の歌が、『リア王』の道化によって嵐の場で歌われるものの「替え歌」であるといった、演劇作品間での相互影響関係を、いくつか確認することができた。

そうした基礎的研究作業に基づいて、執筆した論文『The Song Remains the same? -As You Like It の挿入歌をめぐる考察』においては、『お気に召すまま』の譜面が現存する挿入歌 'It was a lover and his lass'を手がかりに同時代の楽譜を精査し、(1)それがリュートおよびヴィオール属による **whole consort** であるために大衆劇場での上演が音量的に困難であることを確認したうえで、(2)劇中の多くの歌のパートを担当した役

者が Amiens を演じる Robert Armin であるならば、挿入歌は宮廷仮面劇さながらに、劇の地のパートと有機的に関与しうること、さらに(3)知的に洗練された舞台での道化の機能が、William Kemp に代表される身体性から Armin による歌曲へと推移した可能性を指摘した。この考察は、1972 年の W. Ringler, S. May による仮説を踏まえた Juliet Dusinberre(2006)による、Henry Stanford の *Commonplace book* 所収のエピローグの存在が、*As You Like It* が 1599 年 2 月 20 日のリッチモンド・パレスでの女王御前上演を示唆するという説を補強しうるものである。この知見は、1980 年代の新歴史主義を代表する論文、Louis Montrose, “‘The place of a brother’ in *As You Like It*: Social Process and Comic Form,”(*Shakespeare Quarterly* 32, 1981), 28-54 に展開される、演劇が大衆劇場に押しかけた貧困層の若者の社会への不満に対する安全弁として機能したという主張を根底から覆すものである。さらに King’s Men の新しい「歌える」道化 Armin は、『十二夜』のフェステも演じたはずである。このようにわずか二つのシェイクスピア喜劇を例にとっただけでも、挿入歌を劇団員の構成や舞台構造との関係から見直すだけで、作品の受容について従前とは大きく異なる状況、演劇と社会の相互参照に基づいた新しい角度からの作品読解が提案可能で、英文学史・文化史に新しい視点を提供できることがわかった。

なお、研究期間内の公刊には間に合わなかったが、現在上記論考を発展させたかたちで、挿入歌と道化の関係についての論考を執筆中である。

5. 主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計 1 件)

境野直樹 「The Song Remains the Same? -*As You Like It* の挿入歌をめぐる考察」『岩手大学英語教育論集』(査読無) No. 13, 2011, 113-128.

(<http://ir.iwate-u.ac.jp/dspace/simple-search?query=境野直樹&start=0> 掲載予定)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

境野 直樹 (SAKAINO NAOKI)

研究者番号 : 90187005